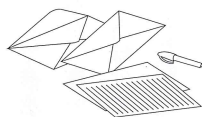


辰巳会
だより



本部
新年例会

平成十九年度

新年例会御出席者名簿

平成十九年一月十九日(金)正午より

神戸三宮「第一樓」

(敬称略)

鈴木治雄	楠瀬正明	貴答恵子	金子峻	金子ソメエ	金子孝蔵	亀田訓生	落合滋	小野晶子	大塚融	王鞍延子	今村三郎	池田泰雄	安東浄
	以上二十五名	中谷尚美	金野和夫	(事務局)	柳田辰巳	宮永悠紀雄	松下重男	坂東みどり	西岡嘉子	西岡義久	中宏	東條佳子	須藤欽吾

新年例会は、晴天にめぐまれての開催になり、正午より柳田幹事の司会で始まりました。

鈴木会長のご挨拶は、新年穏やかな正月でしたが、一方、国内では日常的に親子関係における残忍な事件が多いことを嘆いておられました。辰巳会のことでは、出席されている皆様の熱心な気持ちに支えられていること。「たつみ」

誌が七十号になり、記念号として内容を増やしている紹介がありました。また、辰巳会はこの先も継続していく考えを述べられました。日本と国際情勢の関係について、特にアジア隣国との関係を政府がどのような外交を進めるのか、重要な時代になっている。そのほか日本の戦後の子供教育が抱えている問題に言及されました。

会長のご挨拶が終わり、乾杯の
発声は長老須藤さんによって出席
皆さんのご健康、そして辰巳会の
発展を祈念して乾杯をして一同中



る玉岡がおるさんにスピーチをいただくことになりました。玉岡さんは鈴木商店女店主鈴木よねを題材に、十一月下旬出版の長編小説「お家さん」の作者です。執筆にあたって資料の少ないなかで完成させた苦勞のお話でした。この後、須藤欽吾さんの発声により、皆さんの健康を祝し乾杯。

会食の中でのスピーチで大塚融

平成十九年度

秋季例会御出席者名簿

平成十九年十月十六日(火)

ルミナス神戸2「サールドメール」

(敬称略)

安東	今村	王鞍延子	大塚融	小野晶子	落合滋	金子孝藏	金子ソメエ	金子峻	楠瀬正明	須藤欽吾	鈴木治雄	玉岡かおる	月岡定康
月岡昭子	東條佳子	西岡義久	西岡嘉子	福井崇子	藤野欽司	坂東みどり	松下重男	宮永悠紀雄	柳田辰巳	(事務局)	金野和夫	中谷尚美	以上二十六名

さんは玉岡さんの「お家さん」が多くの人に読まれるように応援される嬉しい話がありました。

船は明石海峡大橋の下を再度通りぬけて中突堤に向かい、次のスピーチは月岡定康さんがされ、しばらく歓談のあと安東幹事長の国政選挙の情勢、官僚の動き等の安東情報披露されました。盛りたくさんのスピーチあり、二時間二十分の周遊も着岸が迫り、船上会場で記念撮影で和やかに例会は終わり、下船となる。

東京支部 新年例会

今年の元旦、日本は全国的に穏やかな好天気恵まれ、東京でも美しい初日の出を拝むことができました。こんな年には、きっと良いことがある気がします。

新年例会は一月二十五日正午に
皇居前の東京會館にある「プルニ

本部秋季例会

ドの話をされました。西岡さんはお祖父さんが鈴木商店の下関支店に勤務、お父さんは顧問弁護士をされていたとのことでした。大塚さんはいつも鈴木商店に関係する貴重なスピーチ、特に高畑誠一・永井幸太郎さんについての造詣に深い話でした。金子孝蔵さんの新年を祝う小唄をお聴きし、ここで終わりの時刻となり、安東幹事長のお開きの挨拶のあと記念撮影で新年例会は終了しました。

秋季例会の会場は、平成六年、平成十四年と秋季例会同様の三回目となるルミナス神戸2の船上になりました。今年に残暑の厳しい氣候でしたが、今日は薄曇ですが、秋らしい爽やかな天候になりました。乗船は神戸メリケンパークホテルの建物内からになり、十

平成十九年度

東京支部 新年例会御出席者名簿

平成十九年一月二十五日(木)

東京会館・レストランブルニエ

(順不同・敬称略)

住田正二	速水優	速水	武岡輝彦	木村隆昭	西川明子	澤田明浩	森田英子	荒木義弘
加瀬豐	池田宗吉	安東浄	移川京子	松木幸夫	稲田隆	荒木義弘	以上十六名	

られたことを披露され、全員大きな拍手でお祝いしました。次いで、

幹事長の安東さんが「自分はまだ西川さんのお歳の半分にもならないが、身体も頭も効かなくなってきた」などと冗談をとばされながら、刷り上ったばかりの「たつみ70号」を全員にお配りになり、「この記念号は内容のあるもの出来上がったが、毎回原稿集めに苦勞しており、皆さまからの資料



の提供や寄稿を是非よろしく」などおっしゃった。

武岡さんの力強いご発声で一同乾杯し、会食が始まりました。

荒木さんから昨年末、双日の主な役員とともにハノイを訪問し、事務所設立二十周年記念式典に出席されたこと、その席上ベトナム政府から双日に対し日本では初となるベトナム国友好勲章が授与されたことを披露されました。

また同じく荒木さんからご出席の日本製粉澤田会長が特集されている経済誌「フォーブス」が回覧されました。澤田会長のお話によりますと日本製粉は今年創立百十一年目を迎えられた由で、一時は鈴木商店傘下、その後は三井系列とされているが元々は独立系の資本家が数人集まって創業したベンチャー企業で、その独立自主の精神は変わることなく今に引き継がれているとのことでした。

会食中はいつものようにいろいろ

ろな話題でにぎやかでしたが、最近出版物や映画で取り上げられ話題になった硫黄島の話となるや、

この島での遺骨収集が滞っている話からご自身の戦争体験、お身内の貴い犠牲などに話は及びました。何れも真に身につまされる思いでお聞きしました。なお、アメリカ映画「硫黄島からの手紙」に準主演した加瀬 亮という俳優さんは双日加瀬社長のご長男だと聞いてちょっとびっくりしました。

話がはずむ中に、ふと気付くと予定の時間となっており、最後に記念の写真を撮ってもらってお開きとなりました。

東京支部 春の例会

いつも入梅の時期と重なって雨が気がかりとなりますが、今年の春の例会は曇天ながらもまずまずのお天気の中、6月7日、帝国ホテル

平成十九年度 東京支部 春の例会御出席者名簿

平成十九年六月七日(木)
帝国ホテル内・なだ万
(順不同、敬称略)

佐田 正二	荒木 正雄
速水 優	森 美子
速水 きみ	移川 京子
武岡 輝彦	安東 浄
木村 隆昭	松本 幸夫
加地 律子	荒木 義弘
稲田 宗吉	以上十四名

ルにある京料理の「なだ万」で行われました。皆さんお揃いになられたところで、まず記念の写真を撮り、全員着席の後、支部長の荒木さんがご挨拶で「今年の全国大会は鈴木よね刀自の70回忌を記念する大会であったので神戸まで参ったが、大変盛会でありうれしく思った。本日も多数お集まりいただき、ありがたく、今後とも協力をよろしく」と述べられ、続いて幹事長の安東さんからも全国大会には

双日株式会社より西村特別顧問、

稲田広報部長の出席に加え立派な供花までいただき、記憶に残るよい大会になったこと、更に別件として金子直吉翁ご出身の土佐の町から他の二町と合併するのを記念して直吉翁の顕彰碑を建てる計画をしているとの連絡があったことを報告されました。

速水 優様から「全国大会とい、今日の例会といい、いつも盛会で辰巳会が続いていることは大変喜ばしい。双日もご苦勞の末、今回復配を実現されたのは誠にめでたい。日銀を辞して日商岩井に移った際、お付き合いのあった新聞や雑誌の記者の方々が「海鳴会」なるものを作ってくれ、この会も続いている。名はそのころ上演されていた鈴木商店を題材にしたお芝居からとったものだ。これからは辰巳会が末永く続きますように、そして会員の皆さまのご長寿を」とご挨拶があり、乾杯のご発声に

全員で唱和し会食になりました。

函館市からご参加の加地律子さんから次のお話がありました。7年前、96歳で亡くなったお父上彦太郎さんは鈴木店の小樽店に勤務、退職後古美術商など手広く事業を展開、函館市の商工会義所の役員もした人で、いつも辰巳会の会合を楽しみにしていた。律子さんも事業を引き継ぐ傍ら、商工会議所



委員やユネスコ常任理事などをなさっている。数年前一度全国大会に出席したが東京支部へは初参加である。最近、函館は全く地縁のない新しい市長を選出し、大いに活性化している。洞爺湖サミットも本決まりし、真に沸き立っている感じである。

料理を楽しみながらご出席の皆さんの歓談が続きました。話題は地域格差の問題、若い人の教育の問題、航空機や鉄道の安全対策の問題など多岐にわたり、瞬間に予定の時間となり、お開きとなりました。

散会の前に、双日の稲田さんから全員に新しい双日のプロモーションビデオが配られました。帰宅後拝見しますと、会社の現在の活動が詳しく紹介されているのに加え、その源流である鈴木商店の生い立ちと隆盛ぶりが貴重な映像や資料と共に描かれており、よき記念となるうれしい贈り物でした。

東京支部 秋の例会

東京支部秋の例会は十月二十五日正午からざくろ京橋店で開かれました。初参加として双日総合研究所副所長の吉崎達彦様と双日秘書部の小林正幸様が出席されました。

開会のご挨拶のなかで、支部長の荒木さんは「今年の夏は異常な暑さが続き、身体にこたえました。皆さんのお元気なお顔が見られてうれしい。世の中は突然の首相退陣や食肉、食品の偽装、不当表示の問題などひどいことが次々に起こり不安一杯ですが、健康に注意してどうぞお元気です。また引き続きこの会にご協力を」など述べられました。

続いて幹事長の安東さんから昨年春の例会の際にお話された加古川市在住の玉岡かおる氏の鈴木商店を題材にした小説「お家さん」

が十一月末発売される運びである

と同氏から知らせを受けたことを報告されました。これについて初参加の吉崎さんは次のように補足されました。「この席に新潮社からゲラ刷りを預かって来ているので、ご覧ください。上下2巻の長編の大作で、鈴木よね刀自がお家さんとして金子直吉翁と共に鈴木商店を盛り立てて行く努力と涙と友情の物語になっていて、その中

平成十九年度

東京支部 秋の例会御出席者名簿

平成十九年十月二十五日(木)

ざくろ京橋店

(順不同・敬称略)

住田正二	荒木正雄
速水優	池田宗吉
速水きみ	西川明子
武岡輝彦	森美子
木村隆昭	移川京子
澤田浩	松木幸夫
稲田隆	吉崎達彦
安東浄	荒木義弘
小林正幸	以上十七名

には女性作家らしいフィクション仕立てもあり楽しく読めた。著者は鈴木商店の活動についてよく勉強されたようで、私すら知らなかったようなことも書かれている。皆さんにも興味のある作品だと思う。皆で珍しいゲラ刷りの本を回し読みさせてもらいました。

もう一つ読み物が出席者全員に用意されており、それは日商岩井OBで元理事の宮田義清氏がOB会報に寄稿された「鈴木商店のこと」と題するものでした。事務局から宮田氏の経歴や鈴木商店との関わりも説明され、鈴木をよく知る人の目で観た鈴木商店の商魂が今に引き継がれて来ている模様が描かれていて興味深いものでした。

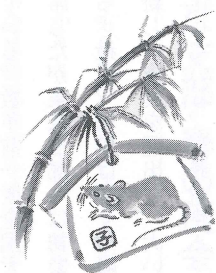
会の半ば、森美子さんからご長女のこと雑誌に採り上げられたと月刊誌「CASA」が回覧されました。森さんはご主人に帯同して米国に十二年、英国に三年などの長い海外駐在生活を過ごされ

ましたが、帰国の際ご長女は米国に残りハーバード大学に進まれ建築学を学ばれました。そのご長女が今米国で最も活躍している日本人の一人として紹介されたのです。森さんはご長女の今日があるのも、鈴木商店が時代に先駆けて積極的に海外進出を果たしていた結果だと、常々思っているとおっしゃいました。

土陽会と鈴木商店

常任相談役 須藤 欽吾

本会は鈴木商店関係者が土曜日に集まって会食をしたのが始まりという。この鈴木商店は関東生まれの鈴木岩次郎が神戸で砂糖商を始め、三井、三菱をしのぐ取引高をあげる貿易社にのし上がった。この原動力となったのが土佐生まれの番頭金子直吉で、同社には土佐人が多かった。



かつて技術的に、もたもたしていた小林製鋼を金子に紹介した後藤勝造も信州生まれで、神戸で三菱岩崎弥太郎に取入り、大回漕店にのし上がった。金子は技術的に一人前の神戸製鋼として、製品を松方の紹介で呉海軍工廠に売り込もうとしたが、失敗した。

ここで、われわれの高知一中先

輩、依岡省輔が持ち前の強心臓と能弁で山内長官に面談、さらに土佐出身の海軍将官にわたりをつけ、ついに売り込みに成功し、今日の神戸製鋼の基礎を築き、今年度創立百周年を迎えた。

昭和二年鈴木商店崩壊後、金子のより所として太陽鉱工が出来た。ここへ東北大学より移って来た私や、さらに後藤の孫娘と家内輝子子が細川流盆石同門として交際したことを考えると、因縁浅からぬものがあるようだ。(田野町出身)

神戸高知県人土陽会報 第31号(日18)

廣野敬吾氏を讃えて

落合 滋

この寄稿しました記事は現・長崎大学(元の長崎高商)卒業生の会で「瓊林友の会(けいりんとものかい)」と言うのがありますが、

この会が現在も存続し、定期的に会報が出されており、この会報に掲載されたものを、長崎大卒の小生の友人が送って来てくれたものです。この瓊林友の会の初代世話人になられたのが、鈴木商店に八年間籍を置かれた長崎高商の卒業生・廣野敬吾氏と言うことで、後輩の野田さんと言われる方が、瓊林友の会の発展に多大の功績があった廣野氏を讃えて、彼の生涯を会報で紹介しているものです。

尊敬する初代代表世話人

廣野敬吾先輩の生涯(上)

野田 操

はしがき

瓊林友の会は、昭和五十四年一月の有志による新年会の集いをもって、発会式として創立され、廣野敬吾氏が代表世話人に就任された。それまでに二年間の準備期間をおいて、会の理念、組織、機能の三要素を整えての出発であった。これは廣野敬吾氏という人間性に富

んだ尊敬すべき先輩を中心に、自然と多士済々の人材が集まり、代表を支えて今日の基盤ができたのである。

廣野敬吾氏の瓊林友の会の発展に対する絶大な功績を讃え、同氏の尊い生涯を偲びたいと思う。幸いなことに同氏が米寿を記念して「野草春風」と題して、立派な自叙伝を遺されているので、それを資料にして三回に分けて紹介する事とした。

兎も角明治生まれ、二回の世界大戦と、関東大震災に横浜で被災され、入社された鈴木商店の倒産等波乱万丈の人生を生き抜かれた方である。(以下敬称を略します)

生い立ち

廣野敬吾は、父廣野寿吉、母テルの長男として、明治二十七年(二八九四年)七月一日、熊本県八代市本町で出生した。父は二十

四歳で独立して、当時は民営であった煙草製造と販売業を始め、熊本県下で屈指の業者に成長されている。十台位の機械が稼働し、大勢の男女工員さん達が忙しく働いている様子が、子供であった敬吾の記憶にあった。その後煙草製造と販売は官営となり廃業となった。その後転業交付金を得て、肥料商と煙草小売業を始めた父は、敬吾を家業の後継者にしようという思いから、小学校に上がる前から朝夕町に野菜売りに出したり、算盤を習わせたりしたのは、いやな思い出であった。嬉しく思ったのは、七歳になった時に、球磨川の水泳道場入門させてくれたことであつた。当時の川は水量も多く、底も深く、流れも早かった。水泳は健康を与えてくれ、負けじ魂も付けてくれたと思うと語っている。

この球磨川での水泳には、夏休みになると、東京その他の各方面で上級学校で学んでいる先輩達が